

“安心の環”の中で 子供の多様な 能力を育む

神奈川県綾瀬市の保育士研修会より

「親子の対話の時間」が保育士を対象に行われた。
より多くの子供たちに愛が届けられる。

教育ジャーナリスト **渡辺 研**



イラスト/森永みく

も織り込み済みだったと思うが、今回の取組はその延長線上にある。6月中旬、市内の保育園の保育士対象の講座が、綾瀬市保育士研修会として開催された。研修会のテーマは「子供が幼児期に身につけてほしい能力の育て方」。「10の姿」も意識していただいている。母親対象以上にこの「幼児教育と学校」に重なるので、様子をお伝えしたい。

梶谷先生のご専門はコミュニケーション。幼児教育とは異なる視点からの子供の育ちへのアプローチは、保育士さんたちがふだん無意識に実践してきたことを、意識化させてくれたようだ。

心を回すおまじない

月曜日の午後6時、保育士さんたちが市役所の会議室に集まっていた。11園から約70名、園長先生も含めて年齢層は幅広く、男性保育士の姿も見える。仕事の終わりに大変だとは思いますが、貴重な機会だ。保育士自身の学びはもちろんだし、ふだんの講座にお母さんが参加できない家庭には、保育士が学んで実践し、それを保護者に伝えてもらいたい。そういう意味もある研修だった。

梶谷先生は母親、父親も、保育士も「養育者」と呼ぶ。子供たちが信頼を寄せる相手は両親や祖父母(保護者)とともに、保育士(者)も含まれる。

る力)を育てようと思った取組だ。もちろん、子供たちにその力がどう育ったかを確認するには5年、10年単位の時間と経過観察が必要だ(まさに、ペリー就学前プロジェクト)。しかし、母親たちは、極端に言えばその日から変わった。

講座を3回参観した。子供との接し方を学び、仲間ができ、子育てをもっと楽しむようになった母親たちの姿を目の当たりにした。子供の成長のために、親に「親として」育ってもらおう。講師の梶谷久美子先生は、その点

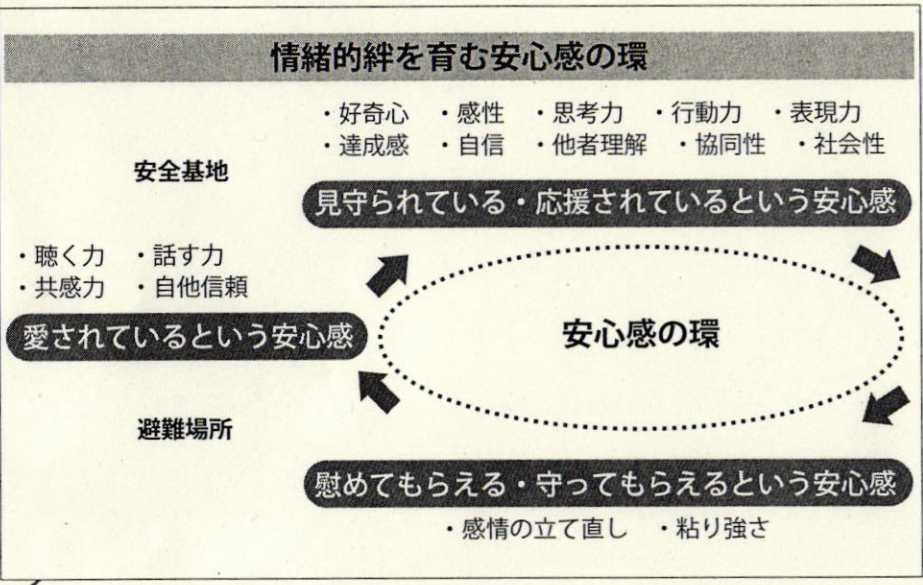
コミュニケーションの視点から

綾瀬市の取組の紹介は、なかばシリーズ化しているようでもあるが、この先、単年の講座開催だけにとどまらない展開も期待されるので、折に触れて取り上げていきたい。

7月号で2018年度の取組の成果をお伝えした。もともとは保護者の関わりにより、子供たちの非認知(的)能力(自己肯定感、自立心、自制心などの自分に関する力や、協調性、共感する力、思いやりなどの人と関わ

研修会は、ふだんどおり「握手(心を向ける挨拶)から始まった。「はじめまして。今日はよろしくお願ひしますね」という気持ちを作り、それを言葉に出さずに表情や体で表現し、手の温もりを通して伝え合う。初めての体験に、思わず笑顔になり、大きな笑い声も起こる。心は伝わったようだ。

「心を開けるあいさつ」にはいろいろな意味がある。みんなが自然に笑顔になったように、この場には互いに安心できる関係ができ



て、それを確認できた。子供は大人を見て育つ。大人が周りの人たちとどう関わっているかを見て学ぶ。この握手は儀礼的な挨拶ではなく、研修はもう始まっている。

「大人も子供も『楽しい』と思えるとき、一番学習効果が上がるといわれます。私たちはリラックスして安心していられる状態ではないと、楽しいと感じることはできません。安心感が持てるど気持ちが悪く着き、情緒が安定します。この状態が一番、物事に集中して取り組めるし、夢中になって頑張れるのです」

そして、安心感が子供の様々な能力を育てていく、その安心感を養育者はどう子供に与えていくかというお話が始まる。

一生懸命、聴いてあげる

上の図は「情緒的絆を育む安心感の環」(梶谷先生が作成されたものを、一部、簡略化した)。とても大切なことなので、「安心感」は先生のお話をできるだけ丁寧にまとめさせていただく(本誌読者のためにも)。

大切なことなのだが、先生は「特別なことではないのです」とおっしゃる。図の「愛されている」という安心感から出発して、育つ力を確認しながらゆっくり1周して見ていただきたい。保育園や幼稚園の先生方は、安心感と子供に育つ力の関係性を、生活場面を思い起こしながら実感できるかもしれない。

それぞれの「安心感」でどんな能力が育つのか、先生はどのように説明された。

【愛されているという安心感】聴く力、話す力、共感力、自他信頼

★聴く力 養育者から一生懸命話を聴いても聞かされると、愛されていると実感する。自分の話は聴いてもらうに値する、自分は尊重されていると思う。

「子供の聴く力を育てたいと思ったら、皆さんが一生懸命聴いてあげる必要があるわけです。小さいときに一生懸命話を聴いてもらえた子供は、人の話をよく聞ける子に育ちます。子供の聴く力を育てたいと思ったら、まず、養育者が良い聴き手になりましょう」

★話す力 「子供はいきなり話せません。自分の考えや気持ちを表現する言葉を、大人が話し掛けることで教えてあげなければなりません。子供が何を言っているのかわからないときでも、何を言いたいのか想像して、言葉で補ってあげてください」

「お砂場で遊んだね」「おやつを食べたね」と体験を言葉で表現できるようにする。体験だけではなく「お砂場で遊んで楽しかったね」「おやつを食べておいしかったね」と、気持ちや感情を表現する言葉を一緒に入れる。

「転んじゃって痛かったね」と、気持ちも一緒にインプットしてあげること、子供は自分の気持ちを理解できるようになります」

▲次頁に続く

★共感力、自己信頼 「大人も同じですけど、自分の気持ち理解できて初めて、人の気持ちも理解できます。それが共感力です。そして、自分は愛されていると自信を持って、養育者との関係に自信を持た、そういうことで、自分は外に行っても人とうまく関われると思える。養育者との信頼関係が作れて初めて、子供は周りの人たちとの良い関係を作れるようになっていくわけです」

このことは、現在の園内での子供同士の関係にとどまらず、小学生、中学生に成長しても生きてくる。

「ただし、小さいときは言葉だけでは愛されていることを十分には理解できません。言葉だけではなく、身体感覚、抱きしめてあげることで愛情を伝えてあげる必要があります」

いわゆるハグ。ハグするとオキシトシンというホルモンが分泌される。愛情ホルモン、絆ホルモンと呼ばれ、緊張をほぐすホルモンなのだそう。

「ハグしてあげることで、子供の気持ちをリラックスさせ、情緒を安定させてあげる。なおかつ愛情を実感できることになります」

養育者との関係に自信を持つことで、子供は次のステップに進んでいける。

本間に、特別なことではない。でも、それをおろそかにしている保護者は少なくない。学べる機会が必要だ。

安心して一人で行動できる

「養育者との関係に自信が持てると、子供は養育者から離れて外の世界に出て、一人で行動できるようになります」

【見守られている・応援されているという安心感】好奇心、感性、思考力、行動力、表現力、達成感、自信、他者理解、協同性、社会性、養育者の手を離れて踏み出した。外の世界は、不思議に満ちている。好奇心のおもむくままにいろいろな発見をする、体験をする。日差し、雨、風を感じ、動植物に触れる。おもちゃや生活の道具にも触れる。そういうことを通していろいろな感じ方や考え方を学んでいく。それをまた行動につなげながら、自分で考えて行動できる力が育っていく。

また、見たことや経験したことを言葉だけでなく、絵を描いたり、歌を歌ったり、ダンスをしたり、様々な形で表現できるようにしていく。

「このとき、養育者はちょっと離れて見守ってあげる。応援してあげる。そして、子供たちが表現できたら『よくできたね』『うまかったね』『頑張ったね』と褒めて、一緒に喜んであげます。そうすることで、子供は自信を持ちます。そして、もっと頑張ろうとチャレンジ精神が生まれてきます」

この当たりの安心感? のポイントは、保

聴き手は、良い聴き手。になってその話を聴く。笑顔で、相手の目を見て、うなずき、質問をささみながら一生懸命に聴いてあげる。次に、役を交代。ただし、今度の聴き手は、悪い聴き手。になる。よそ見をし、ノートに書きをし、スマホをいじり、アクビまでする。それぞれの感想を聞くまでもなく、良い聴き手であることの大切さを体感した。

話し方の練習では、梶谷先生から「聴くメカニズム」と「発声のメカニズム」のお話が

あった(気導音・骨導音)。実際の声(音)を再現できればとても興味深いお話のだが、文字だけでは説明が困難なので省略。研修会に参加した保育士さんへの「特典」。

そのメカニズムを意識しながら、「ももたろう」の一節を使って音読練習。そうすることで、保育士の声が、子供の心にスッと届く。日頃の読み聞かせに生かせることはもちろんだし、子供に何かを言い聞かせるときにも、子供は緊張せずに落ち着いて、保育士のメッセージを聴くことができる。

養育者は想像力を豊かに

安心感の環のお話の後、「特に『愛されているという安心感』を与えてあげるには養育者が積極的に子供に働き掛けてあげなければなりません」と、聴く力、話す力、共感力に関する三つのエクササイズが行われた。

養育者が良い聴き手になる練習では、二人一組になり、話し手と聴き手に分かれる。話し手は1分間、今日の出来事を相手に話す。

育士さんはきつとお手のものだろう。

年中児、年長児の場合、外の世界での様々な体験も、総じて「遊び」というのだから、遊びの中で子供同士の人間関係もできてくる。「さらに、今度はお友達との関わりの中で、自分と友達とは違う感情を持っているんだというところに気づくわけです。そうすると自分の気持ちをコントロールしながら、友達と協力しながら行動ができるようになって、思いやりや優しさを示すようになる。そして物事の善悪がわかるようになり、道徳心が芽生えてきます」

当然、こうした力は集団生活の中で、より顕著に育つ。ぜひ、的確な声掛けを。

大丈夫、次はうまくやれるよ

積極的に外に出ていろいろな体験をして、そこから様々な力が育つが、いつもうまくいくわけではない。転んで痛かった。ふと周りを見ると、養育者の姿が見えなくて淋しくなつた。さてどうしよう。

【慰めてもらえる・守ってもらえるという安心感】感情の立て直し、粘り強さ。

「これは、養育者のところに帰って行けばいいんだよ、したら大丈夫なんだよと思える安心感。悲しかったり、痛かったり、淋しかったら、養育者が慰めてくれる、気持ちを立て直してくれるわけです。仮にうまくいかな

つて相手の気持ちを理解する力だ。

また、自分の感情を言葉で表現できない子供には、子供が抱いている感情を養育者が想像して言葉で表現してあげる。子供は養育者から「怖かったね」「痛かったね」と自分の感情に意味をつけてもらうことで、「これが怖いということなのか」と感情を言葉で認識していく。そして、養育者に共感を示されると、気持ちをわかってもらえたと思ひ、心が落ち着く。こんなふうにして自分の心と他者の心を理解する力が生まれる。このときも、子供ときちんと面と向かう。ことが大切だ。もちろん、大人同士の関係にも当てはまる。話し手の悩みを聴いて(そういう設定)共感を示す練習も行った。練習の後、梶谷先生がこうおっしゃった。

「相手の気持ちが想像できましたか? それを表現する言葉が思い浮かびましたか? 自分がその立場だったらどんな感じだろうと、想像できましたか? 共感を示すとは想像力ありきなのです。子供の共感力を育てるためには、養育者自身が自分の感情を振り返り、それを言葉にする練習を常に行ってください」

そして、最後に参加者同士、一緒に学べてうれしかったと、感謝や励ましの言葉を交わし合いながら8秒間のハグ(相手と自分への愛のメッセージ)。子供たちの成長のために頑張る仲間同士の絆を感じ合えただろうか。